

川上貢 名誉教授インタビュー

Interview with Dr.Mitsugu Kawakami (Prof.Emeritus of Kyoto Univ.)

(平成 15 年 9 月 30 日、於キャンパスプラザ京都・二階和室)

聞き手：高橋康夫、山岸常人、大崎純

登谷伸宏、岸泰子、尾山義高(建築史研究室・大学院生)

記録：細谷豪

■京都大学建築学科入学の経緯

山岸： 建築史学会の戦後建築史学研究小委員会の報告¹によれば、先生は昭和 21 年に大阪理科大学の応用化学から移られて京都大学の建築学科に入学されたということですが、その経緯からお聞かせ下さい。

川上： 僕は都島工業学校で、兄が同じ都島の機械科、親父が建築材料の商売をしていたので、その建築科に入ったけなんです。都島は六年で、普通の工業学校より一年余分に行けた(笑)。五、六年は専門教育でね。そういうことから建築に興味があって、将来も建築を、と思っていたんですが、戦争中の工業学校は上級学校への進学が制限されて、上位の成績でないと受けられなかった。昭和 17 年に五年九ヶ月で工業高校を卒業させられ、その翌年、僕は高望みして三高を受けて失敗したんです。その年にたまたま大阪理科大学ができて、遊んでいたら困るというわけで受けたのです。建築がないので、たまたま応用化学に入ったわけで、好みで行ったわけではないんです。ですから普通の中学から高等学校へというまともなコースではないんです。高等学校も短縮で二年制になっていて、高等教育は一年くらいで、二年目はほとんど勤労員で鋳物工場で釜焚きをやらされた(笑)。昭和 20 年も道作りをやったりして授業はほとんどなく、あってもあまり面白くない化学の授業でした。敗戦で大学に戻ったわけですが、戦後の混乱の時期で、高等学校や大学の受験が可能になって京大を受けたわけです。理工科大学に退学届を出して、もう背水の陣ですよ(笑)。その頃は軍が解体したので、陸士や海兵の軍の学校を終えた人や在学中の人に大学を開放したわけです。だから受験生はほとんど軍服着た人ばかりで(笑)。その時は四月に試験で、入学式は五月十五日でした。まだ京都も食糧難で、特に下宿にいる人は食料がないので、授業が一月くらいあってすぐに休講で夏休みになりました。旧制は三年制で、建築の定員は 20 人でした。

■戦後の京大における建築教育

山岸： やはり設計に興味をお持ちだったのですか？

川上： ええ。ただ、将来のことは入ってみないとわからない

(笑)。一年の授業には、家が焼け出されたので、大阪の近鉄の瓢箪山の親戚の家から通っていました。奈良からの奈良電は買い出し列車でね、芋なんかをいっぱい背負った人が乗っていて、満員でまともに座れなくて途中で疲れてしまう。電車の窓ガラスもなかった(笑)。大学の授業は割合早くて、村田(治郎)先生の日本建築史なんて八時に始まって、きちんと出席もとる。朝一の電車で五時半に出ないと間に合わない。だから、授業はさぼって人のノートを写させてもらった(笑)。それから西山(卯三)さんの授業は建築材料でしたが、専門ではないからいいかげんな授業でね(一同笑)。みんな食糧難でやせてへトへトになっている時で、あまり授業もちゃんとやらしてもらえませんでした。

高橋： 一回生の前期の授業は他に何がありましたか？最初から専門教育だったわけですね？

川上： 横尾(義貫)さんの構造力学、他に森田(慶一)さんの建築計画がありました。僕のクラスは、海兵の人が半分、高等学校と工業専門学校を終えた人が半分で、工業専門学校を出た人は一応、専門教育をやっているの一年の専門は受けなくてもよかった。僕は工業学校だから普通に授業を受けたけど、製図が免除になったのかな。一年の時は植物園事務所の模写で、ちゃんとした図面をそのまま写すというやり方で図面の書き方を覚える。レタリングもサンプルをもらって見て書く。前半はそういう簡単なもので、設計までいかなかった。

大崎： 製図はどなたが教えられていたのですか？

川上： いろんな先生です。村田先生は様式のオーダーの課題を、森田さんも西山さんと一緒に映画館か何かの課題を出していました。西山さんは時々製図室にやって来てはけなすばかりで、みんな腹を立ててね(笑)。あの先生がまともに授業をしてくれたのはやはりご自分の専門の住宅問題や建築生産論で、三年生になってからでした。棚橋(諒)先生の鉄骨構造の授業は休講が多くてね。たまたま出てこられても……ちょっと話されて「ちょっと一服します」と言っでは煙草を吸って帰ってきて、また……ちょっと話して終わられる(笑)。ですからそんなにすることがなくて、何を習ったかわからない(笑)。

高橋： 私は棚橋先生が倒られた直後の学生で、一回も授業を聴いた気がしないんです(笑)。

川上： 『鉄骨構造学』²という分厚い本を読んでいたくらいで。それもノートを本にしたような内容で、あまり詳しいことは書いてない。坂(静雄)先生の鉄筋コンクリート学も割合分厚い本が出ていました、『鉄筋コンクリート構

造学』³でしたか。坂先生は恐い先生と聞いてはいたけど、大人しくなられたのか、僕らにはやさしくてね。授業をさぼってピンポンをやっていると呼びに来られたしました（一同笑）。だから鉄筋コンクリートも肝心な専門の話よりも雑談みたいものが多かったように思います。まあ、僕はいいかげんな学生でした。

高橋： 坂先生は肖像画をみてもすごく勤勉そうですが。

川上： 戦争中の若いときは恐かったらしい。僕のクラスは戦後だったからいいかげんなやつらと思われたのかも（笑）。ご本人も食糧難で畑を耕された時代でね。息子さんが亡くなられたのか、そういうショックもあったのではないかと思います。

講義が面白かったのは村田先生です。ただ日本や西洋の話はあまり面白くなく、二年から三年にかけての東洋建築と建築史特論という授業が面白かった。『建築文化の交流』⁴という本は建築史特論のノートを基にしてまとめられたもので、中国やインドの建築文化の伝播の話です。シルクロードの話は面白く聴いていました。村田さんは、戦争中、支那建築の調査で、夏休みは中国にほとんど行っておられた。昭和18年には雲崗の石窟や居庸關⁵等の調査がありました。しかし、そういう戦争中の反動が戦後にあるわけです。だから（戦後は）中国のこともできないということで、先生自身は中国建築のことはもう断念されたみたいです。それに代わるものとして『宝雲』⁶に法隆寺様式の源流みたいなものを中国の建築から引っ張ってきていつの時代の様式かという論文を書かれた。あれからはもう法隆寺の建築の様式でね。

高橋： 一年では専門と別に一般教養、英語やドイツ語というものはありましたか？

川上： ないです。高等学校で終わっていることを前提としての専門なので、基礎になるのは数学だけで、週に二回ほどの理学部の蟹谷（乗養）という先生の授業でした。あとは午前専門の講義、午後はほとんど製図でした。課題が頻繁に出るのでさぼってられない。演習は他に構造力学や棚橋さんの鉄骨があったかな。

高橋： まんべんなくいろんな科目を勉強されましたか？

川上： 何でも一応やっていました。建築設備の横山（尊雄）先生の講義はノートを取らせる主義で、自分でノートを作ってそれを読んで筆記させる。細かなデータをいっぱいね。冬の寒い最中に石炭ストーブでね、雪が降ったりするとものすごく手がかじかんで大変な思いをしました。そんなことだけしか覚えてない（笑）。

大崎： 講義は先生が黒板に書いたものを写す形式ですか？

川上： きちっとした先生は自分でノートを作ってきて、ある一

章分を読まれてはそれを書き取らせて説明するといった形でした。文学部の美学の講義も同様で、美術史の講義は近世絵画の襖絵の土居（次義）先生で、狩野派の画家などの、中世から近世の筆者や作品についての話でした。

山岸： 他学部、他学科の講義は自主的に聴講されたのですか？

川上： それは美学・美術史として科目配当表のなかに入っていました。ですから文学部に聴きにいったちゃんと試験を受ければ四単位くれました。

■建築史への興味

山岸： 建築史の研究を、と思われたのはいつ頃ですか？

川上： やはり村田先生の講義、三年の特論の講義を聴くようになってからです。いや、その前の浅野（清）さんの講義が面白かった。

山岸： 『建築史学』には浅野先生の講義とそれから大森（健二）先生が同期で、よく一緒に歩かれたとあります。

川上： その頃、文学部考古学教室の梅原（末治）という大先生が法隆寺の調査委員をしておられた関係で、浅野さんと呼んで学生に集中講義をされた。そこで法隆寺の修理の話の細かく聴いたのが面白かった。大森さんの手引きもあったかもしれませんが。休み中よくあちこちに見学に行ったりしていました。

また、僕が大学に入った当時は夏休みに百貨店の古書展に行って『建築雑誌』の昭和11年頃から昭和18年頃までのバックナンバーをごそっと買って、暇にまかせて読んでいました。学会の大会論文集の抜刷で梗概を拾い読みして、歴史という面白い学問があるんだなど、それが関心の持ち始めというところもあります。それから法隆寺が焼けたのは僕が卒業した年の昭和20年で、文化財の一つの転機の時期でしょうね。そんなことで歴史への関心はあったわけです。

■村田研究室（村田先生とそのメンバー）

大崎： 三回生から今の修士課程になる感じですか？

川上： 三回生の建築学演習で指導教官を決めて一年間で卒論をまとめるわけです、秋くらいまではゼミをやったね。僕らの頃は村田先生が茶室に興味を持っておられて、龍光院の密庵、孤逢庵、それから玉林院の茶室の実測を建築学演習の課題に出された。メンバーは山田幸一さん、大森さん、沢島邦雄さん（沢島英太郎の弟）で、玉林院は山田さん、龍光院は大森さんが実測に行って、僕も時々手伝ったりしていました。僕は何をやるかと思っていたんですが、あまりその時は茶室に興味がなかったんです。その頃は、藤原義一さんが新制大学に移り替わるの

に論文を書かないといけないということで、学位論文をまとめられた頃で、戦争中は書院造関係の遺構の調査をやっては学会発表されていました。あの頃はそういうことが多くて野地（修左）さんもそうでした。そうして藤原さんの『書院造の研究』⁷という本が出たのを読んでいたんです。その中で『蔭涼軒日録』の記事を使って方丈の復原をやっておられた。それで『蔭涼軒日録』を図書館で借りて読み始めたんです。それが面白くて、それをやりたい、茶室はやりたくないとか村田先生に申し入れて、なんとか許してもらってやったんです（笑）。

高橋： 村田先生はすごく恐そうな先生という印象があるのでよく申し出られたと思いますが・・・。

川上： いや、あの先生は身内には厳しいんです。大学院に入って、ちょっとした原稿を見てもらいに行くのも、それはもうビクビクもので。原稿が真っ赤に訂正されて帰ってくる。よく見てくださいましたけど。ただ、それ以外の人には割合恐くなかったですよ。

高橋： 村田先生は卒論のテーマを出されていたわけですか？

川上： 毎年、指導教官別に卒論のテーマが出て選ぶようなシステムです。教授の先生は坂さん、森田さん、村田さん、棚橋さんの四人、そして横尾さん、西山さん、横山さん助教授。あとは非常勤の先生くらいで、今と違って指導教官を選べるといってもそれだけしかおられないので、選ぶ範囲は限られてきます。また、学生の間でもあまり集中しないように調節していたんじゃないでしょうか。

細谷： 先生がテーマを選んだ時には、最初の設計への気持ちは歴史をやっていく方に変わっていたのですか？

川上： いえ、やはり設計には関心がありました。卒業設計と卒業論文と両方しないといけないですしね。僕は図面を書くのが好きだったんですが、あまり才能の方は・・・。沢島君がデザインの方でクラスではよくできた方です。そんな人もいるから僕は建築家としてやっていくほどの自信はなかったです。あと、戦後すぐでしたから、就職もそう多くなかったですね。建設省の試験で受かった人でも建設省に行けずに大阪府や兵庫県に行っていました。

■大学院への進学

高橋： 先生は就職されずに特別研究生になられたんですね。

川上： 就職はあまり・・・、僕はしたくなかったのかな（一同笑）。大学院に行った方がいいかと思って、なんとなく入っただけですよ。特別研究生というのは戦争中の制度の名残で、何か英才教育みたいなところがあったんじゃないですか。だから卒業時の成績が多少影響したみたいですよ。僕と沢島君だったかな。ただ沢島君は大学院一年の夏休

み前に国鉄の方に行ったのかな。

大学院では大森さんと私で、山田さんはあとから来ました。山田さんは鹿島建設に就職していて、今の西部講堂、以前の武道場を映画館に改装した工事の時に現場監督でやって来たのかな。そのあと大学院に戻ってきたんですよ。それからもう一人は兵庫県の人で、あまり顔を出さなかった人ですが、いつの間にか兵庫県の尼崎の工業高校の先生になりました。旧制の大学院はほとんど上がいなくて、僕らのクラスだけでした。大学院の部屋と机をもらったんですが、藤井厚二先生が教授でおられたときの部屋が空いていてね。それが今の高橋さんの西隣の大きな部屋です。僕一人だけいることが多かった（笑）。

高橋： 20人の内、大学院に進学されたのは何人くらいですか？

川上： 村田さんのところに僕と大森さんと尼崎に行った人、構造に名古屋大学の松岡理さんと、4人くらいです。松岡君もアルバイトばかりであまり出て来なかった（笑）。彼は海兵出身で、横尾先生について、曲面板構造か何か、坂先生の影響でやっていたのかな。あの頃はまともに大学院に行っている人はいなくて、戦争中に兵隊に行ったりして、途中で復員して帰ってきて大学に籍だけ置いているという人が多かった。神戸大学の向井（正也）さんや奈良女子大の扇田（信）さん、工芸繊維大の建築設備の石原（正雄）さんとか。向井さんや扇田さんは大分上です。一時はぶらぶらしたりして助手になったりしていましたね。その中で西山さんと『建築学研究』⁸の戦後の第一号を始めたわけですよ。西山さんが言い出して、向井さんや扇田さんが主に編集をやっていました⁹。

■大学院の研究生活から講師へ

山岸： 大学院に残られて、もう住宅史の研究でやっていこうと思われましたか？

川上： いえ、初めは、藤原義一さんの関係で、『蔭涼軒日録』の記事の中の禅宗の方丈の平面の復原をやっていて、「御影の間」の間取りで、藤原さんの説と意見が異なったんです。大学院に入っても、まだ専門を決めるというわけではなく、卒論の情性みたいにそれを継続してやっていました。ただ方丈というものには関心がありましたね。また、大森さんが大学院を途中でやめて京都府に入った関係で、金地院の八窓の席や大報恩寺の修理の現場等によく行っていました。大徳寺の龍光院もたまたま大森さんの茶室の実測の手伝いに行ったときに、龍光院の昭堂に関する史料を住職が出してきてくれたんです。以前、沢島英太郎さんが龍光院の茶室を研究されたときに昭堂も調査されて、重要文化財、むかしの国宝に指定された。

指定の造立年代は寛永二十一年、江月宗玩という龍光院の開山が亡くなった年に建ったという解釈でした。ただ確かに寛永二十一年に昭堂はできているが、今のものと規模が違う。そこで普請帳に基づいて今の昭堂と比べてみると慶安にもう一度建て直したらしいと。こうして昭堂の史料、普請帳から建立年代が指定の年代と違うということがわかって、それを『建築史研究』¹⁰に載せたわけです。それがきっかけで、昭堂という建物を研究して、鎌倉へ円覚寺の舍利殿や建長寺の重文の昭堂の建物を見に行ったりしました。昭堂とは要するに開山を祀るためのお堂です。五山では中世にそれを造るのが普通だったんですが、五山ではない大徳寺では、塔頭でも建物が貧弱で、近世になってからひとつの流行として昭堂を受け入れるわけです。沢庵等が江戸の帰りに鎌倉に寄って五山の建物を見たのでしょう。数は少ないですが龍光院や大慈院、芳春院に昭堂はあります。そうして初めは禅宗の塔頭に關心をもって、『禅院の建築』¹¹を書きました。これは割に好評で、東大の史料編纂所の禅宗専門の玉村竹二という大先生が読んで、買ってくれてね。それと合わせて書院造の床のことをやりました。神戸大学の野地修左さんという大先生と関係があって、野地さんは学位論文をまとめるのに東求堂の研究をされました。東求堂に「西向の床」というのがあって、『蔭涼軒日録』に出てくるその記事の解釈を、『建築史研究』¹²でいわゆる床の間論争を盛んにやりあっていました。床の間は板敷というのが野地さんの説です。

また、堀口捨巳さんは設計の第一人者ですが、戦争中は『君台観左右帳記』の研究¹³や茶室の研究をされていた。『利休の茶室』¹⁴などは戦争中に発表されました。

『君台観左右帳記』の研究や『画論』に発表された洛中洛外図屏風の建築的研究¹⁵を村田先生から教えてもらって読んだのが面白かった。堀口さんは『君台観左右帳記』と座敷飾の書の考証から始めて最終的には東山殿の復原というところまでいくわけです。その時、関心は持ちましたがそれほど詳しく調べるつもりはありませんでした(笑)。あとからいろいろと参考になってくるんですね。

高橋： 古文書や古記録の見方は村田先生から何か教えられたのですか、それとも独学ですか？

川上： 村田先生は読み方なんて教えてくれませんでした。独学です。文学部に古文書学の講義があったので、初めは履修届を出すんですが、行かないままのことが多かったです。東大史料編纂所の相田二郎先生の『日本の古文書』¹⁶という本を手引きにしていました。時々わからない字があって国史の大先生の赤松(俊秀)さんのところに助

けを求めて行ったことも(笑)。赤松さんをはじめは府庁(社寺課)の文化財の課長をしておられて、それで大学に戻って来られていたんです。

高橋： 最初はあまり興味がなかった書院造や東山殿などの研究を大著になるまでにやってみようと思われたのはどんなきっかけですか？

川上： 足利將軍邸の研究は東京文化財研究所におられた伊藤延男さんが最初で、初代の尊氏の邸宅から義教の室町殿の研究あたりまでされていた。僕は必ずしも將軍邸をやるつもりではなく、方丈の研究からだんだん鎌倉時代の住宅のことを調べだしたのです。それで伏見殿、持明院殿、土御門東洞院殿や鎌倉時代の諸御所のことをやりだして、時代的に集めてまとめていかないと、と思ったわけです。村田さんの定年が昭和33年で、それまでに学位論文を、という制約もあった(笑)。昭和28年12月に講師になってから5年です。

その時分、教官は少なかった。若手では小堀(鐸二)さんが先任者で、講師になって部屋に同居させてもらいました。一階の一番西の部屋で、前田(敏男)さんがよく遊びに来てはストーブを囲んで話していました。

■建築史研究と設計教育

山岸： 私が一番悩んでいるのが、設計教育と建築史研究との絡みです。先生は設計の教育もされていたわけですよね？

川上： 講師の時は、講義を持たしてもらえないので、設計演習の初歩の指導、様式演習くらいです(笑)。課題も村田先生が考えを出されたものを手伝う程度で。村田先生の方針は若いときはあまり授業は持たなくてもいいということでした(笑)。だからほとんど自分のことばかりやってきました。村田先生から福山(敏男)先生に代わって西洋建築史の講義を持たされたわけです。西洋建築なんて僕は全然ノータッチだったわけで(笑)、一から勉強を始めてね。それまでに近畿大学の前身の大阪専門学校の建築科に、大学を出た年、非常勤で日本と西洋の建築史、村田先生と同じものを教えに行ったんです。西洋建築史は、アメリカの建築史家、F. キンブルの『西洋建築史』¹⁷を参考にしよう村田先生に言われて、それを基にしました。その頃、ペリカンブックのベヴスナーの本¹⁸等ははまだ一般に出回ってなくて、百貨店などで買えるようになるのは大分あとです。ベヴスナーの本は非常に参考になりましたけど。教室で西洋建築史の勉強ばかりやっていたので、福山先生に「翻訳をやっているのか？」と言われて(笑)。設計の課題を持たされるようになったのもその頃からです。福山さんはそういう設計はやっ

ておられなかったのですね。

高橋： 東求堂とコーヒーショップの課題でしたね？あれはいつ頃でしたか？

川上： 初めの方で、東求堂の模写は様式建築の代わりです。あとになって四回生あたりの大きな課題を担当しましたが、計画系の人たちが中心で、僕は本当に手伝いといったところでした。歴史講座というのは、むかしと違って、あまり設計と関係しているところは少ないですね。

大崎： 先生は卒業設計は担当されていたのですか？

川上： 学生に合わせてやっていましたが、卒計をやる人が少なかったの、卒論の指導はやって、卒計の方は・・・。

山岸： 今、僕が設計の指導をするときは、新しいものをつくるといった経験が全くないので、やはり伝統的な建築を理解させたり、保存と絡めて課題を出すわけですが、先生の頃には伝統建築を設計の中で教えるという意識はお持ちでしたか？

川上： 別にその頃、そういう意識はなかったですね。東求堂を選んで様式演習の代わりにしようというくらいで、様式という問題をあまり設計と結びつけることはなかったです。僕は学生の時に、森田先生の工芸論という講義の演習のなかで電気スタンドの設計の課題が出たときに燈籠の形をした電気スタンドを設計しましたが（一同笑）。

山岸： 今、建築史の講座に来るかなりの学生や院生は設計志向で、建築史を志して研究室に来る学生は少ない。そういう学生に対してどういう教育をしたらいいのかといつも悩むんですが、先生の頃はどうでしたか？

川上： こちらから学生に働きかけるということはほとんどやらなかったです。「来るものは拒まず」というか（笑）。大学院入試では計画系、特に設計意匠の、川崎（清）君や加藤（邦男）君のところに学生が集中しました。

高橋： 設計には増田（友也）先生や加藤先生、上田（篤）先生、川崎先生と結構いましたが、どれもちょっと相性が悪い、自由に設計したいと思う連中が歴史研に入ってきましたね。そのうち一番有名なデザイナーが岸（和郎）君です。修士からで、修論は土浦亀城か何かをやって。あの頃は設計の優秀な人がたくさん来ましたが、研究プロパーという人は少なかったです。

川上： 岸君は学士入学で、もとは電気の学生でしたね。

高橋： 昭和40年代にしては珍しく、設計をしたいけど歴史もやっておこうという風潮がありました。そう言えば高松さんも歴史講座だったね（笑）。

川上： 高松君もそうですね（一同笑）。

山岸： 研究室の学生には特にテーマを与えずに自由にやっておられたんですか。

川上： そうです。別にみんなあてはないではなかったから（笑）。割に自分で近代を選んでやる人が多かったです、石田（潤一郎）君やあの辺の学年はみんなそうです。

大崎： 今は設計をやるうと思ったら、四回生からやらないと間に合わないとか？

高橋： そんなことはないと思うけど。今の人の選び方は割と早くに決めてしまって、他に道草する感覚があまりないんだろうね、あんなにゼミ配属で必死になるというのは。

■建築史研究室と設計活動

細谷： 歴代の建築史講座の天沼（俊一）先生や村田先生は設計されていましたね、寺院の建築とか。

川上： 天沼先生はよく設計されていました。黒谷の金戒光明寺や大阪の四天王寺の金堂・五重塔、それから高野山の根本大塔もそうです。村田先生はご自宅くらいであまり設計はやっておられないですね。山形にお寺がありましたか。大阪市大の白木（小三郎）さんの故郷か何かです。それから山口県の防府天満宮。あれは僕が図面を書かされたんです（一同笑）。大阪上本町の藤次寺も僕が図面を書きました。それから嵯峨美大の学長をされていた佐和（隆研）さんの伏見のお宅も村田さんがスケッチを描いたものを僕がやったんです。大きな切妻の、三角の妻を見せるようなデザインです。

高橋： 結構されていますね（笑）。今で3つか4つありますよ。

川上： 人の手伝いたくらのものでね。棚橋さんの東本願寺の会館の増築の図面を少しやりました。それで外国旅行の旅費を出してもらってね。

■「保存」という思想

山岸： 昭和45年くらいから西山研が「京都計画」等で保存ということで活躍されましたが、建築史講座はあまり関わりはなかったんですか？

川上： 全然関係ないです、講座が違うとね。そういう呼びもなかったし（笑）。今と違ってそういう保存なんてことはあまり話題にならなかった。昭和30年代は経済の高度成長期で、建築史なんて影が薄くてもうかすんでいた時代で、眼中にも置かれてなかった（笑）。中村泰人さんは新入生歓迎会で「もう今は構造と環境工学の時代だ」とか公言していた。西川（幸治）君とよく話をしてね、建築史なんてものは潰されてしまうのではないかと（笑）。そういう意味では逆で、保存なんて言っていたら張り飛ばされた時代ですよ（一同笑）。大学の中でもどんどん明治の建物を壊していた時期です。僕が教授になってからようやく歴史的建造物の保存委員会ができ

て、病院や工学部のレンガ造の保存第一号ができて。横尾さんが熱心でした。文化庁で明治建築の保存を言い出したのもあって村田先生は割合、明治建築に関心があって、熱心に保存のことを言っていました。京都国立博物館の旧館は早く指定が出ましたが、そのあとはダメで河原町や五条の教会はなくなってしまった。京大でも病院の古い建物はいつの間になくなった。医学部でも基礎医学、解剖学くらいで、生理学も法医学も潰れたしね。それから物理と化学の実験所のレンガ造の教室がありました。物理が学生部の関係で残っただけです。工学部では機械の一号館が僕の学生時代には残っていましたが壊しましたし、機械の工場も旧三高時代に機械科ができたときの建物なので残しておけば良かったですね。ただ肝心の先生方が古いのはあかんって全然評価しない。部外者が何を言うという感じでね。あの時は工学部の拡張時代で、建築も第二学科ができて学生が増えてね。新しい建物をどんどん建てるのにみんなもう夢中でしたから。古いものを潰さないで建てられないから、それを残せなんて言い出せるような雰囲気ではなかった。あの時に残しておけばよかったと思うけど（笑）。そういう力もなかったから（笑）。言えるようになるのは昭和49年以降くらいじゃないですか。

大崎：今は外観だけ残して中を変えることができますから、むかしとは大分違いますよね。電気の建物も前だけですね。

川上：電気の建物も委員会では初めは全部保存にしていたんです。それがだんだん手狭になって古いレンガ造では仕事ができないなんて言う教官がいて。それで電気の先生と話し合っ、やっと前だけ残すという形で落ち着いたんです。あれは川崎さんの設計でしょう。

高橋：やはり委員会の組織が認められて学内全部を調べた調査がきっかけですか？

川上：そうです。横尾さんは学内でこの人がいればという感じの人でね、遺跡の発掘調査、廃棄物の処理施設と、なんでも屋です。要するに人の嫌がることを引き受けてやった。歴史的建造物もそういうところがあった。時代もだんだんそういう方向に向かいつつあったからかもしれないですね。中京の郵便局の改築の話¹⁹が出てきて、三条通りの保存運動をやったんです。それから京都市の近代建築のリストを作ったりしてね。全国的にも割合早いほうで、その後、東大の村松（貞次郎）さんが建築学会でお金を集めて全国リストを作られて²⁰盛んになってきた。ですから中京郵便局の保存問題というのは割合大きかったですね。あれは学会の歴史意匠委員会に取り上げてもらって、何回も郵政の設計の人に来てもらってね。

結局、上の交渉で外観保存というのが決まったんです。あれから外観保存ができるようになってきた。最近をよく学会で保存の要望書も取り上げてくれるようになりましたが、あまり効果がないですね（笑）。

高橋：手続きとしては理事会決済でとてもきついんです。単独では駄目で、必ず支部と歴史意匠小委員会と合わせるので、結構手間がかかって間に合わなくなる。建築史学会が機能的にカバーしているんですが、成功率は25%くらいで、高いと思うんですが。

■建築学教室所蔵の史料の保存と公開

高橋：講義室は今の本館の西の方でしたか？

川上：建築の講義室は、旧館の東西に二つあって、以前の増田先生の部屋が講義室でした。ところで、桂へのキャンパス移転に伴って、会議室の肖像画や図書室のものはどうなるんですか？

高橋：学部用の本は吉田に置いて、原則としては全部桂へ持っていきます（笑）。先生、ちょっと不便になりますよ。

川上：標本や地下室にある古瓦は？あの拓本は福山先生の時に山本栄吾さんに取らせたんですよ。カードになっていて写真も貼ってあって本物を見なくてもわかるようになっていた。あるはずですよ。

山岸：瓦は今、文学部の考古学教室が調べてくれています。

川上：二階、講義室の上の西側に標本室というのがあってね。その東側は図書室の閲覧室、南側は書庫だったんです。僕のいた部屋もやはり標本室だったので、部屋に入るときに瓦と建築材料の見本が陳列ケースに入っていたものを全部外へ出したわけです。

山岸：材料見本は今、新館四階の廊下の北側においてあります。

川上：あれは異（和夫）さんがあの部屋をカードの分類室に使うと言って外へ出したわけです。その前に僕は南側の部屋のを外へ出したわけです。法界寺の阿弥陀堂などの模型がほとんどでした。

高橋：ケース入りのものはほとんど戦前の標本ですか？

川上：そうです。事務室に購入したときの台帳があります。

山岸：それは今僕が持っています（笑）。だいたい大正に納入されていて、納入業者とか全部書いてあります。

川上：他には石膏模型とレリーフの大きな板があります。あれも全部教室が始まる時に買われたものだと思います。

山岸：壁に今掛けてありますが、使い方に困っていて・・・（笑）。

高橋：新しいところはそういう設備や空間がないですね。

川上：どこかの壁に掛けたらいいよ（笑）。ああいう標本というのは、本当に邪魔になるわけで・・・。入学したときに中をさっと一度だけ見せてもらえたきりで、鍵を掛け

て全然見せてくれない。だから邪魔者扱いになっていて全部放り出してあるわけですかね。あそこに天沼先生が朝鮮に行かれた時に取られた拓本の軸がありました。今図書室に入っているのかな。以前は、今の計算機センタや新館の図書室のあたりに石油化学の二階建ての実験工場みたいなものがあったんです。そこが空いていた時に標本類を入れていた時期がありました。

高橋： その時に法界寺の模型を建築の玄関に置いたんですね。他の、本館の二階や廊下、一階の半円形になっているロビーのところに置いてあるのも・・・。

川上： 前から鉄骨ラーメンの教材のようなものや民家の模型等がありました。あれはそのまま僕の学生時代から変わりなく、廊下は展示室によく使っていて、卒業設計の代表的なものを額に入れて掲げたりしていました。

高橋： 展示施設として使っているという意味ではすごく古い。

川上： 今の文学部陳列館が総合博物館になったでしょう。あそこには工学系のもは入ってないんですか？古瓦などは移管してもいいんじゃないのかな？

高橋： 文化史・自然史・美術史が入っているんですが、スペースも所蔵品もほぼゼロです。そこで、土木と建築の持っているものを博物館、事務局あたりはバカルティークラブと称していますが、京都大学技術史交流館という名で、全学共同利用施設として見せられるようになればと思っています。建築の本館は全学の保存建物になっていて、建築が理科系の、土木の赤レンガが文系としてね。土木の先生方に協力してもらって、辻（文三）先生（工学研究科長）のところで、工学研究科の技術史料保存調査委員会というのをやってやっているんです。

川上： 建築の貴重書にもいいものがありますね？ヨーロッパ、中国関係のものでも。建築の書庫は活用できないの？

高橋： あれは桂に持っていても全然値打ちがなくて、吉田にある方がいい。ただ建築の新館は来年か再来年に耐震改修をやって引き渡しなんです。

山岸： 学内の文学部や他の学部の人たちも使いますしね（笑）。

川上： そうなると図書室に持ち込んでいる写真やマイクロフィルムはきちんと残してもらえるのかな？天沼さんの書かれた図面などはコンドルさんの図面の様に一度ちゃんとそろえておいて欲しい。

高橋： コンドルさんの図面などのちゃんとした管理下におかれているものは大丈夫です。ただ、もう少し額装を作るとかね。学生にも見せられないものがほとんどですね。

川上： 国の重要文化財という形でもっていけないのかな。

大崎： 独立行政法人になると財産として利用した方が・・・。

高橋： いずれそういったことになって来ると思います。学会も

建築博物館を作ってきちんと保管しようとしていますから。社会的貢献の一つの在り方だと思います。

山岸： 古瓦やコンドルさんの図面などは割にすぐ評価はわかるのですが。例の石膏や材料模型などは（笑）。もちろん意識的に展示すれば、非常に貴重なまとまった史料なんです。ただ置くにしてもどうしたらいいのか（笑）。

川上： 誰かに評価してもらったらどうですか。あのレリーフも貴重なものと思います。模型も、どこかの銀行か証券会社かの模型は、その会社の古い建物がなくなってしまって、模型しかないというので寄贈してね。帝国ホテルの模型は、犬山の明治村へ貸し出したことがあって、移動するときにちょっと壊れたかで、大分修理してもらったとか（笑）。あれも現物はもうないから貴重なものです。

高橋： 法界寺の模型は桂に持っていく時に入口に入らないという話があって（笑）。ただこれ幸いに吉田に置いておけばいいという問題でもなくて、置く場所もまたない。

山岸： 法界寺の模型は、学生に講義の途中に行かせて平面図を取らせる練習で使っているの。あれは唯一使っている例で（笑）。積極的に展示して見てもらう仕組みがないと、むしろ邪魔者扱いされてしまいますね。

■建築史研究室歴代教官の研究資料

川上： 居庸關の大きな拓本は？あれは村田先生が定年で辞められた時に、附属図書館の、今は閲覧室になっているところで展示したことがあります。あれは貴重なものと思うけどね。吹田の民族学博物館にその拓本の一部を展示してあります。

高橋： 図書室にありますね。

大崎： 公開して説明しないとイケませんが、説明できる人がいなくなってきているんですね。

川上： 大判のカメラで撮った居庸關の写真類も拓本と一緒にあるはずですよ。教官の研究資料はまともに残されていない感じですね。天沼先生の方も村田先生が引き継がれてね。会議室の東側の部屋、つまり村田先生の部屋の半分は天沼先生の持ち物でした。そうして天沼先生が撮られた写真のアルバムも僕のところに引き取ったんです。写真のガラス乾版もたくさんありました。西洋建築史の講義で学生に配るために、フレッチャーを全部ガラス乾版にとって、それをコロタイプで印刷していたわけです。僕が学生の時には増田先生からもらっていました。以前は写真のアトリエがあって、そこでジャイアンツというあだ名の写真屋さん（武田清吾）が専門にやっていました。そこが遊んでいたのを増田さんが自分の設計のアトリエに使ったんですね。その時にガラス乾版を全部引き

取ったんです。朝鮮の古建築の写真の乾版とフィルムもケースに入っているはず。あれは朝鮮の人が来て焼き付けを作ったと言われて何回か作りました。フィルムは、天沼先生が亡くなられて持ち物を出した時に村田先生が教室の方で天沼家から買われたか何かで、図書室で管理しているんです。

高橋： 当時としては手間と費用がかかっていたんですね。

川上： 天沼先生が文学部の『史林』に連載していた「日本古建築研究の棗」をまとめた『日本建築様式の研究』²¹という本があります。あの先生は細部ばかりでね、基礎から始まってディテールを全部自分で書かれて。それをまた建築の学生に配るわけで、在任中はずっとその図面ばかり書いていたんじゃないかな。そのケント紙に墨入れされた原図が残っていて、それを本の図版に使って図書室の書庫に移管したはずなので探したらあるはずですよ（笑）。あれは貴重なものです。他には大学の施設部の持っている図面を全部コピーしました。僕らの頃は原図を借り出して青焼きを作ったりしていました。

■これからの建築学科、大学について

山岸： 今の建築学科に対する注文、学生や教官に対するサジェスションがありましたらお聞かせ願いたいのですが。

川上： 辞めてからももう15年も経ったらわかりませんよ。特に内部の講座が大きく分かれたりして、全然見当がつかない編成で（笑）。とにかく今の大学は大変だと思います。特に独立行政法人になったらね。文部大臣の主導権が強くて学長の任命権もあるんでしょう？ 外から見ていると何かよくわかりません。

山岸： 中にいてもよくわかりませんが・・・（一同笑）。

川上： 特に学部がかわいそうで、大学院が中心となってしまって、もう放ったらかしでね。

高橋： 学部の学生がちょっと何か聞きたいと思っても教官は桂にいるわけですからね。

川上： なんか学部の学生は切り捨てですね（笑）。

山岸： 一番鋭いところをご指摘頂いて・・・（笑）。どうも長時間、今日は本当にありがとうございました。（終）

註

1. 戦後建築史学研究小委員会「<小委員会活動報告>戦後建築史家の軌跡<第三回>川上貢」（『建築史学』第三十七号、2001.9）
2. 棚橋諒『鉄骨構造学』（山海堂出版部、1938）
3. 坂静雄『鉄筋コンクリート学教程』（産業図書、1948）
4. 村田治郎『建築文化の交流—中国篇—』（高桐書院、1947）

5. 『居庸關過街塔基調査假報告書』（蒙古文化研究所、1943.12）、村田治郎・藤枝晃共編『居庸關Ⅱ』（京都大学工学部、1955.3）がある。

6. 村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」（『宝雲』三六 1946.4）

7. 藤原義一『書院造の研究』（高桐書院、1946）

8. 京都大学建築学教室が1927年5月に創刊。一時中断、1946年8月に再刊するも1950年に終了。

9. 「新建築学研究 TRAVERSE」vol.1（200.6）の横尾名誉教授のインタビューにも同内容について掲載。

10. 川上貢「竜光院の昭堂—創建時の形式と前身建物について」（『建築史研究』no.13 1953.10）

11. 川上貢『禅院の建築』（河原書店、1968）

12. 野地修左「東求堂床間考」（『建築史研究』no.4 1951.3）

13. 堀口捨巳「君台觀左右記の建築的研究—室町時代の書院および茶室考」（『美術研究』第一二二号～一二六号 1942.2-9）

14. 堀口捨巳『利休の茶室』（岩波書店、1949）

15. 堀口捨巳「洛中洛外図屏風の建築的研究—室町時代の住宅考」（『画論』第十八号 1943.2）、のちに堀口捨巳『書院造りと数寄屋造りの研究』（鹿島出版、1978.12）に再録。

16. 相田二郎『日本の古文書』上・下（岩波書店、1949-54）

17. Fiske Kimball and George Harold Edgell “A history of architecture”（Harper & Brothers, 1918）

18. Nicolaus Pevsner “An Outline of European Architecture”（Penguin Books, 1957）

19. 日本建築学会近畿支部『京都・中京郵便局庁舎調査書—三条通東洞院—』（1974.2）

20. 日本建築学会編『日本近代建築総覧：各地に遺る明治大正昭和の建物』（技報堂出版、1980.3）

21. 天沼俊一『日本建築様式の研究』（思文閣、1975）